

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
(実践報告)

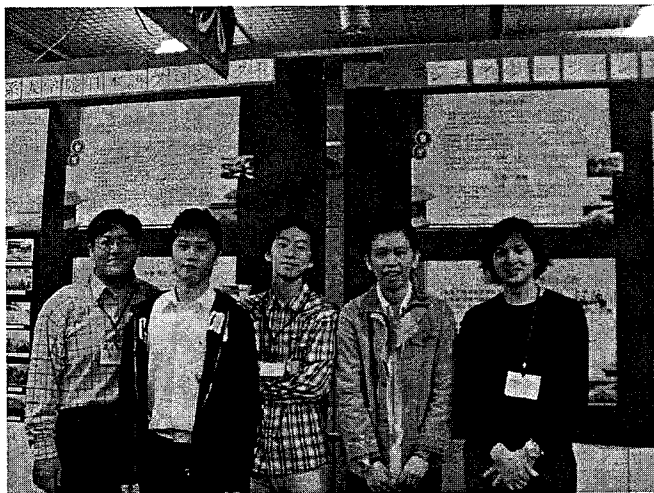
# 「日本語プロジェクトの歩み 及び実践報告」

日本語プロジェクト:横川 彰

## 1. 経緯

2006年に開講した東海大学日本語文学系大学院と同時に立ち上がった「社会的実践プロジェクト」であるが、本プロジェクトは大学院の二年生を対象にした活動である。基本的には「言語接触領域」、「表象文化領域」、「社会コミュニケーション（公共性）領域」の三つのプロジェクトで学生自身が興味を持った領域活動に参加をする形になっており、本プロジェクトは「言語接触領域」に関わる領域に関心を抱く教員、学生が考案した活動、「日本語プロジェクト<sup>1)</sup>」である。

活動の経緯としては、大学院一年生の時に教員と大学院生全員で訪問をした台湾台中縣霧峰郷にある長青学苑で開講されている日本語クラスを見学した事から始まる。長青学苑では、55歳以上の市民を対象に開講をしており、開講されている授業の中で日語高級班<sup>2)</sup>（上級クラス）を訪れた。クラス見学後には日本語教師及び学習者達と懇談する機会があり、主に大学院生達から日本語学習者<sup>3)</sup>に対して幾つかの質問をした。例えば、日本語学習者の多くは戦前に日本語教育を受けた経験を持ちながら何故、戦後60年以上経った現在においても日本語の習得に励むのか。また戦前、日本語は台湾



2008年3月展示会に於いてグループメンバーと

総督府から国語として言わば強制的に教育された言語である反面、戦後においては中国大陆から渡ってきた国民政府から使用に当たり抑圧を受けた時期もあった言語でもある。その日本語を新たな国語である北京語が存在する中で、なぜ現在になっても日本語学習者が日本語の学習に励むのか。またその目的とは何かなどである。日本語学習者達は大学院生の疑問に対して、日本語を使う事によって日本統治時代を懐かしむ事、そして日本語を使用するからこそ当時の思い出を忘れずにいられる事などの答えがあった。確かにそうなのであろう、日本語は彼ら彼女達の「ことば」であり、現在においても学習する「言語」でありながら、「言語」の向上を目指す以上に自分の「こと

ば」の維持をも目的としている。長青学苑での日本語学習者達に接した事がきっかけとなり、学習者達にとっての日本語とは何なのか、また彼ら彼女達が日本語を通じて経験して来た事に興味を持った教員と大学院生5人<sup>4</sup>によって2007年5月に「日本語プロジェクト」を立ち上げるに至った。

## 2. 内容（一年半の流れ）

プロジェクト開始前の活動を通して、私達は特に、今どのような日本語の授業が行われているのか、また、戦前日本語学習者がどのような環境で教育を受けていたか、という点に関心を持った。こうした関心を日本語世代の方たちと共有する為にも、授業の見学する事だけではなく、日本語学習者と一緒に私達自身が授業への参加を試みる事が必要であると感じていた。そして活動は、霧峰にある長青学苑への再訪問から始まった。この活動を通して、プロジェクト参加の学生からは以下のように興味を抱く意見が提出された。

- ・日本語学習者達が受けた教育と現在における台湾の学生が受けた教育の違い。更に自分の祖父母が受けた教育と霧峰の日本語学習者達が受けてきたものとの違い。
- ・哈日族<sup>5</sup>について日本語学習者達はどのように思っているのか。
- ・クラスには日本植民地時代に教育を受けなかった学習者も居るが、何故、今日日本語を習う事を考えたのか。

これらの疑問はただ一方的に尋ねるのではなく日本語学習者達と一緒に活動、例えばカラオケ会、料理<sup>6</sup>、俳句を作る事などで関係を築き、交流する事を考えた。そして最終的には日本統治時代に日

本語教育を受けた人びとが歩んできた人生で伝えたい事、また大学院生が彼ら彼女から聞きたい事などをライフ・ヒストリーという形にする提案が学生達から持ち上がった。日本語学習者達から許可を貰った上で人びとの経験してきた事などの語りを記述し、それをまとめた物を紙面に残すのである。更に当時の経験や記憶を思い起こす事として、彼ら彼女達が保管している戦前の教科書、写真などから語られる事にも注目をした。そこから語られた事を現在の日本語学習者達の家族にも伝える事が出来るのではないかと考えた。このようなライフ・ヒストリーを文字化し、出版物として残そうと言う作業は後に長青学苑の日本語学習者以外の人びととの交流にも広がっていった。

当初は霧峰郷の長青学苑まで足を運び活動に興味を持つ日本語上級クラスの受講者達との交流を目指していたが大学院生自身が既に交流を持っている日本統治時代を経験した人びとも本プロジェクトを実践する上で意義があると考え、長青学苑の受講生達との活動と平行して戦前当時の語りなどを聞く事になった。この結果、5人の大学院生が各自1名から2名の日本統治時代において日本語教育経験者と接する事になった。語られた事は、相手の許可を貰った上で録音をして文字化を行なった。

順調に見えた活動も新年度を迎えた後の10月頃から幾つかの問題点が浮上してきた。問題の1つとして、大学院生各自が日本教育経験者と接する事を目的としてきたが、大学院生一人一人が取り組んできた文字化作業などの進行状況の足並みが揃わなくなってきたのである。要因としては大学院生と日本語教育経験者との間において、本プロジェクトに対しての取り組み方の違いがあげられる。大学院生側としては初対面である日本語教育



◆ ◆ ◆ ◆ ◆

経験者との関係を築き上げて行く為に接する時間をなるべく頻繁に設けたい考えがあった。前述したカラオケ会や料理会などを通じて親睦を深めて行く方法である。一方、一部の日本語教育経験者からは2回か3回の面談を行い、そこで自身が持っている経験及び伝えたい事を集中的に語りたいたいという要望があった。この問題は大学院生が本プロジェクトで望み求める事を日本語教育経験者側へ事前に伝え切れなかった事であったと考える。

「4. 成果と課題」で後述するが、本プロジェクトは大学院生が研究者として、日本語教育を経験した人びとを調査協力者として位置づけるような研究調査を望まないものである。活動の目的としては、大学院生と日本語教育経験者とが共同的に活動する事が重要であり、日本語教育経験者の経験して来た事を「調査」する事では無いのである。その意識の問題が大学院生側にある為に日本語教育経験者と接するとき、または彼ら彼女が語ってくれた事、聞いた事をどのように第三者へアウトプットして行くのが困難と感じる問題が出てくる。学生が本プロジェクトへ取り組む意識が大きな問題となっていたのである。

このように当初は日本教育経験者から語られた事、伝えたい事などをライフ・ヒストリーと言う形で紙面にして出版する方法でアウトプットしていく方法を構想していたが、もっと異なった視点を持ち実践報告を行う事を考えた。「外」に向けてのアウトプット、伝える事を考えた結果、本プロジェクトでは以下の三点を実践報告として行う事になった。

- ・2008年3月東海大学日本語文学系主催国際学術会議「ことば・ひと・越境」に於いての展示会

- ・霧峰長青学苑日本語上級クラス日本語

学習者へのポスター発表及び報告会

- ・東海大学日本語文学系文化領域概論クラスでの発表会

以上三点の実践報告会を順に次章「3. 活動報告」で表していく。

### 3. 活動報告

#### 3.1. 「東海大学日本語文学系主催国際学術会議」での展示会

2008年3月8、9日の両日に行われた「東海大学日本語文学系国際学術会議『ことば・ひと・越境』」にて「東海大学日文系大学院日本語プロジェクト～ジェネレーションを越える交流」展示の発表を開催した。ポスター作成にはまず、霧峰長青学苑との交流目的、交流を通じて学生が感じた事、更に長青学苑での日本語学習者が現在においても日本語を使い続けている事の意義を記載して紹介を行った。そして、日本統治時代から現在までの言語使用を中心にまとめた関連年表も作成し発表した。その他にも日本語学習者達から戦前に撮影された写真を多数借りて展示した。当時、撮影された写真を観る事で、その時代に経験した出来事などが思い起こされると考えたのである。そして写真の中には戦前当時に撮影された日本統治時代の建物も含まれており、それらの建物が現在においても残されている場合には以前の写真と現在撮影した写真を対比される形で表してみた。

日本語学習者の中には現在、日本語を使用して俳句をつくる活動があり、それらの作品も日本語学習者の許可を貰い、「作品集」という形で展示を行った。展示の発表には主にシンポジウムの出席者を対象にしたが、数人の日本語教育経験者が興味を持ち来場し、展示作品に目を向けていた。多くの来場者が日本語で書いた俳句に興味を持っていた事には、少

し驚いていた様子であった。

### 3.2. 「霧峰長青学苑日本語上級クラス」でのポスター発表

2008年4月16日、霧峰長青学苑にて3月に東海大学で行った展示発表会の報告を兼ねて、日本語学習者達にポスター発表を行った。報告会において、日本語学習者達が特に興味を持ったのが、自分達の俳句作品が同世代の人びとだけでなく、自分達より若い世代、または日本から来た人達が日本語学習者達の作品に関心を寄せていた事の報告をしたときであった。今までは自分達の作品は知人など、近い関係を持つ人達へ見せる事が殆どであり、違う世代の人達が日本語で書いた作品に注目してくれた事は嬉しく感じると述べていた。日本語学習者とは一年を超える交流を重ねてきたのだが、これまでは日本語学習者達の経験してきた事を聞く側に回る場合が多かった。

一方、私達学生が交流で感じた事などを話す、または発表する機会が少なかったと感じていた。このような事から、日本語学習者達へどのようにして学生側から交流で感じた事などをメッセージとして発信できるかを模索していたのだが、長青学苑でのポスター発表は彼ら彼女達との一緒に行う交流活動の第一歩を踏み出したと感じられた。

### 3.3. 「東海大学日本語文学系文化領域概論クラス」での発表会

2008年5月27日の午前と午後それぞれに学部1年生を対象とした東海大学日本語文学系文化概論クラスにて日本統治時代から現在における台湾の言語使用状況、及び日本語プロジェクトの活動に関する紹介と討論会を行った。各クラス共に50人ほどの受講生の参加があった。討論会では最初にプロジェクト活動の主旨

を説明、そして台湾での日本統治時代と、戦後の国民党政権による国語政策に関する講義をした。

その後は受講生を10人ほどのグループに分けて台湾の言語状況について考察を行った。例えば、現在における台湾の「国語」といえば北京語になるのだが、その呼称について「華語」という名付けが新たに存在する。北京語も台湾で以前から使われていることば、ホーロー語、客家語、または原住民諸語と同じようにひとつのことばである事に変わりはない。「国語」という一つ突出したものではなく「華語」という呼び名で表す事に関しての意見を聞いた。

また、日本語プロジェクトでは今まで老年層の人びとから経験などを聞いてきたのだが、今回はその自分達が接してきた人びとの孫の世代にあたる学生の言語使用状況に関して考えてみた。各受講生に祖父母の世代からの言語チャートのようなものを作成して貰ったが、それぞれの学生が非常に興味深い言語環境で育っている事がわかった。そして学生の中から数人が代表として自身の現在における言語使用状況を発表したが、北京語をはじめ、大陸の言語、ホーロー語、客家語、日本語など、台湾における多言語状況を受講生の言語使用状況から窺い知る事ができた。

更に、授業の最後には受講生達に、「未来に自分達が（こどもに）残したいことば」とは何かという質問をした。受講生からは現在、多く使用されているホーロー語、北京語に加え、英語を残したいという意見も聞かれた。

## 4. 成果と課題

日本語プロジェクトの発足から一年間の活動は主に日本統治時代に日本語教育を経験した世代の人びとを対象に接して



きたが、彼ら彼女達の日本語に対する経験から語られる事は非常に興味深いものであった。ある人は戦後、日本語を使用する機会が次第に減少したが、日本語教育時代に教わった歌は今でも忘れずにいる。歌の歌詞をノートに書きとめ、時間を見つけてはそれを見直すと共に口ずさむ。歌を口ずさむと戦前の日本時代の記憶が甦ると言うのだ。俳句にしても同じような事を語る人がいた。昔の日本人教師の思い出を歌にする人は戦後になっても恩師と手紙のやり取りをする事、または台湾に招待をしてクラス会を開く事で日本人教師への恩返しが出来たと感慨深げになる。更に今回のプロジェクトを発足する機会を与えてくれた霧峰の長青学苑に通う老年層の日本語学習者達は週に二回、日本語授業を受け、日本語能力の維持だけでは無く、現代日本の芥川賞などを題材にした小説を使用して、新しい日本語を習得しようと意欲を見せる。そして授業に参加する事で、過去の日本語教育時代の記憶が甦り、授業に参加をしている同世代の受講生達と昔を懐かしむ姿もしばしば見られた。戦前の学校では日本語使用が強いられ日本語教師の厳しい指導があったが、今ではそれも良い思い出と語る話も頻繁に耳にした。

彼ら彼女達と行動を共にする事により、台湾における日本語への意識の一端を垣間見る事が出来たのは活動における一つの成果であった。そして、聞いた事や語られた事をシンポジウム、学科の授業などを通じて外部の人びとへ紹介出来た事も実践活動から生まれた結果だと考える。

実践活動の一環として、「東海大学日本語文学系文化領域概論クラス」においてはプロジェクト活動で学んだ事の紹介と共に、受講生達の言語使用状況を基にして台湾の言語のあり方を考察した。そ

の結果、受講生達も老年層の人びとと同じように個人個人で台湾社会の多言語状況の中で言語接触を経験している現状を知った。日本語教育を受けた世代の経験した事などをより深く考える為には、新しい世代がどういった状況で周りの環境からことばを引き継ぎ、現在の台湾で如何なる言語状況に置かれている事も知る必要があると感じるのである。日本語教育経験者の次世代の人びととの交流は今後、必要であり、課題であろう。

そして、前述した通りに本プロジェクトは研究の調査目的での活動ではなく、外部の人びとと共同で協力をしながら関係を築きあげていく事が重要なのである。ただし、今回接した日本語教育経験者の人びとから例えば、語りなどを聞くときにはこちらが用意した質問などに答えて貰うケースがあった。大学院生が調査者となり、日本語教育経験者を調査協力者とする図式が出来てしまうのである。「プロジェクト」が「調査」とならない為にも重要な課題として今後の活動を考える必要があると思われる。

## 5. 今後

2008年9月より「日本語プロジェクト」が新しい目標を掲げて出発した。新二年生<sup>7</sup>が中心になっての活動であるが、現代の若者が使用することばに注目する内容のものである。これにより、「日本語プロジェクト」として日本語教育経験者との活動機会は減少する事が予想されるが、活動を通して知り合いになった人びととは今後も個人的な活動に切り替え、台湾で使い続けられていることばに接していければと考える。

## 注

- 1 本プロジェクトは言語に関わる活動であり、必ずしも「日本語」だけに焦点を置くものではない。よって、「日本語プロジェクト」は活動を行う上での通称となる。
- 2 クラスは約40人の学生で授業が行われている。
- 3 受講者の多くは日本統治時代の日本語教育を経験しているが、クラスの受講生の中には第二次世界大戦後に日本語学習を始めた人もいるので、本稿においては「日本語学習者」と記載する。
- 4 プロジェクト発足当初は大学院生6人で開始したが、その後1名が他のプロジェクトへ移籍した。
- 5 主に日本の流行文化に興味を持つ台湾の若い世代を指すことばであるが、近年では香港、中華人民共和国などの中国語文化圏でも使用される場合がある。
- 6 この場合の料理とは、昔はどのような食事だったのか、一緒に再現をする事をしてみたいとの意見から生まれた。
- 7 本研究所二年生で本プロジェクトに参加している、彭康嘉は今後の活動方針として以下のように述べる「これまでの交流対象であった日本語教育経験者から視点を変え、現在の若い世代の日本語学習者である高校生や大学生が感じている日本語の学習意識、または、普段日本語・日本文化との接触状況に注目する内容のものである。そして、ただ単にそれらを調査するのではなく、いろいろな形として共に共有・参加できる活動、例えば、日本語のテレビ番組、音楽などから日本に関心を持つ学生が集まり、関係を築き上げ、若い世代の日本語学習者と交流することが目的である。今学期の日本語プロジェクトの活動の経験、そして長青学苑の日本語学習者との交流から得られたもの

と照らし合わせながら、違う世代間で生じる日本に対する意識などを共同で考えて行きたい」。

